

景徐周麟の漢詩文における「梅」に関する一考察

武 穎

On The Plum blossom in Keijyosyuurinn's Chinese Poetry and articles

Wu Ying

要 旨

梅は文学作品でよく見られるもので、豊富なイメージと概念が備わっている。中国文学における「梅」への認識は長い歴史過程を経て、宋の時代になってからその概念が次第に充実させ、大量に漢詩や漢文によって詠まれている。梅はその開花の時期、花の色、形、影、さらにほかの風景との組み合わせなど、様々な形で詩や文に現わすだけではなく、その厳寒に耐えられる「歳寒精神」と「君子」というような高潔な節操を持っているイメージによって、古来の文人に好まれ、歌われている。

五山文学後期の景徐周麟は高度な漢文教養を持つ禅僧であり、五山文学後期の代表詩僧でもある。その詩作では、自然風物、特に「梅」が大量に取り上げられている。景徐は梅を愛好し、魏晋南北朝以来の梅に関する詩作を受容し、数多くの「梅詩」を書いた。その梅詩は題材がかなり豊富で、梅のイメージも様々であり、あらゆる方面の美しさが窺える。また、宋以来の梅に関する抽象的概念を受け、その「氷肌玉骨」の実質と淡泊隠逸の気質を描き出している。さらに、景徐は梅を悟道の手段とし、そのイメージと抽象的概念などを生かし、あらゆる事物に広げて、悟道の境地に達している。

このような景徐の梅を題材にした詩はこれまでに本格的な研究対象になったことはなく、本稿では、「梅の美しさ」と「梅の精神」、「梅と悟道」など三つの部分によって、景徐周麟の漢詩文における「梅」を考察している。中国文学における「梅」のイメージと概念の歴史とその内容を十分把握した上、景徐周麟がそれを受容し、さらに変容させたものを探求し、その梅詩の特徴を明らかにしている。

キーワード：梅、イメージ、概念、受容

はじめに

景徐周麟は五山文学後期の優れた文筆僧、文芸僧、学問僧として知られるが、その高才が認められるもっとも重要な要因として、やはりその手によって作られた五山文学後期の代表作の『翰林葫蘆集』があげられる。上村観光編の『五山文学全集 第四巻 翰林葫蘆集』の解題には「五山の文学書中、巻帙浩瀚、當代各種の史料に富めること、義堂周信の空華集と伯仲の間にあり。」¹と景徐の文学作品の質の高さ、量の多さと内容の豊富さについて激賞している。『翰林葫蘆集』は17巻ある。漢詩の数はあわせて1522首であり、その内容から見れば、義堂周信以来平明穩健の詩風に影響されたため、咏物詩の数が圧倒的である。その中で、「梅」に関する作品がもっとも多く、その内容や主旨もかなり豊富である。

「梅」という花は冬の末から春の初めにかけて咲く花で、その美しさと寒さを凌ぐ強さで古くから中

¹上村観光編『五山文学全集 翰林葫蘆集』(1973) 思文閣 p.1

国の文人たちに愛され、詩文において詠まれている。中国文学における「梅」は長期にわたって重視されず、いわゆる「遺梅」と言われ、次第に重視されるようになり、さらに取り上げ方が「実」から「虚」に転じることによって、特別な概念が備わる過程を経た。日本の五山文学はこの中国文学において梅のイメージと概念を受けて独自の発展をしてきた。その中であって、景徐周麟は梅を好み、内容が豊富で性格が異なる梅詩を作った。さらに、儒釈道一体の風潮が流行る五山禅林において、梅を悟道の手段として、梅に新たな意味を与えた。これまでの景徐周麟に関する研究はただ国文学者の朝倉尚により行われ、それ以外の研究者はほとんどいないのが実情である。朝倉尚は景徐周麟に関する研究を続け、これまで数多くの論文を発表してきた。しかし、朝倉においても、景徐周麟の梅に関する詩を考察の対象にした論文はなく、その意味では本稿の先行研究はないと言える。本稿は景徐の梅詩における中国文学への受容と変容を考察することによって、その梅詩の具体的内容、梅の概念と特徴などを解明しようとする。具体的に景徐の詩作における「梅の美しさ」、「梅の精神」と「梅と悟道」など三つの面から分析するものである。

一. 梅の美しさ

「梅」は中国文学において、最初に味と果実だけを取り上げられ、その審美的価値は長いこと無視され、「遺梅」の一時期を経た。中国最初の詩集の『詩経』では「標有梅、其实七兮」などの詩句があって、皆梅の実用的価値を詠まれたものである。魏晋南北朝時代になると、梅は文人たちに重視され、春の風物として漢詩に入れられた。例えば、蕭子範の「光景斜漢宮、橫梁照彩虹、春情寄柳色、鳥語出梅中」(『春望古意詩』)²などでは、梅は古くから春の物とされる楊や柳などと同じように、春を詠む詩作で使用される言葉である。唐の漢詩では、梅は桃や杏、李などと比べられ、さらに「桃卑梅尊」の概念が生まれたが、宋の時代になると、「梅」を詠む作品が数多く現れ、梅はもっとも多く見られる文学題材となった。『全宋詞』の中で、「梅」を題材とした詩作は440首で、一番多いとされている。³

景徐周麟の詩では、花、鳥、山、雲、水などの自然物がたくさん詠まれ、自然物の描写によって、詩人の自然観照と心情や思想などが自然に流れてくるのが特徴である。その詩文集の『翰林葫蘆集』中で、梅を題材とした詩作がもっとも多く見られ、その梅への愛好の一端が窺える。景徐にとって、「義同骨肉莫如梅」(『答文摠』)、「梅」が何よりも自分に親しい「骨肉」で、「梅」に対する親しみを詠んでいる。景徐の梅詩の中では、古人の梅に対する無視を遺恨とする内容の作品もあるし、他の花との対照によって、「桃卑梅尊」のような主旨を表す作品もある。「暗中模索識梅尊、逐水桃花一任飛」(『花徑暗水』)、「三冬正色有斯友、不可語桃李前」(『歲寒亭』)、「花有宮黃品愈高、未許詩人認杏桃」(『詠魯直腊梅図』)などのように、桃や杏や李子などは春の花で、冬の寒さに耐えられる美質を持っている梅とは比べものにならないような存在ということを強調している。また、梅に関する生活情趣の溢れる詩句が随所に見られる。例えば、梅の開花への期待が裏切られ、「未見有梅梅負吾」(『臈月未見梅花』)、「未見梅花無好詩」(『次春榮少年韻』)と詠み、梅がなかなか咲かないので、がっかりしたり、詩もろくに作れないから退屈だったりすることを表している。また、「花似有私天咫尺、官梅早開野梅遲」、「滿城桃李春千里、第一番梅未放花」(『春寒花遲』)なども梅の開花の遅れに対する不満と残念な気持ちが字面から窺えるであろう。さらに、梅の花見を長く続けたい気分を込めて、「保梅」を内容とする詩も見られる。「明朝又恐隨飛雪、紅燭影中花夜來」(『秉燭看梅 少年落髮』)、「雪とともに飛んでしまうのを恐れ、紅燭を持参して、夜の梅を鑑賞する。「無人掃雪高挑屐、免得橋聲驚落梅」(『次春榮少年韻』)、「梅が驚いて落ちるのを

²漢詩を取り上げる時、「」が詩文を表し、『』は詩の題名を表している。以下同様。

³劉曉慧、周建華「宋詞中的梅花意象探析」『名作欣賞』(2013) p. 72

恐れ、音の出ない靴で庭の掃除をする。『持呪保梅』詩の「有雨有風梅落時、笑吾持呪傍花枝、人帰酒醒可難読、疎影橫斜梵語詩」では、呪をかけてまでして梅を保護する。また、「小童不解主人意、握雪梅邊打落花」（『雪中客至 又』）も禪の趣に溢れている詩句である。これらの漢詩は生活の情趣に溢れ、景徐の梅への好みを生き生きと描き出している。

梅は冬ではなく、春の象徴とされている。「花時」、すなわち花の咲く時間によって、「早梅」「晩梅」などがあり、それによって目の前に広がっている景色は様々あって、詩人の心情もそれぞれによって異なってくる。梅という花は冬と春との臨界点に咲き、時間的には冬と別れ、春を迎え、また春と別れる特別な期間に開花する。また、季節、時間の変化に従って、周囲の景色と合わせて、多種多様な姿や雰囲気を見わす格別な花である。感受性豊かな詩人として、その多様性を敏感に把握し、筆を走らせ、梅の全貌を描こうとしているのであろう。「昨夜梅花知此意、一枝鑄出雪中春」（『汝英』）冬の厳寒に耐え、雪の潔白の中で鮮やかに咲く梅が、「雪中春」のような特別な景色を作り出している。冬に咲く梅は「早梅」とされ、「雪」と組み合わせでよく文学作品に現れている。景徐の『雪里早梅』では、「京寺尋梅和雪看、今冬天氣最多寒、春風何処花開夜、圧折吾廬竹数竿」と、この梅の「花時」の魅力を十分描き出している。京の寺で雪と一体となっている梅を見るのが楽しみであり、長く続く寒い冬の中、どこかから来た春風に吹かれ、私の庭に植えられている竹まで打たれるほど勢いよく咲いている梅の花による突然の春の到来の予報は何という喜びであろう。また、『梅邊別春』詩「天到梅邊復一陽、数枝紅向雪中開、西家蝴蝶寒如此、不得近花春隔牆」では、梅が咲くと陽気が増し、蝶々も舞乱れ、春も壁を隔てて間もなく到来するのであろうという春への憧れの情趣が溢れている。

「早梅」に対して、二月頃に咲く梅は「晩梅」と言い、詩人の花の咲くのを待ちに待つ心情などを表すために書かれている詩作も少なくない。例えば、「何処城影梅尚残、萬松嶺上款門看、為花二月挽回腊、自有吾頭白雪寒」（『城陰晩梅』）では、梅は春の花と認識しているが、雪とともに見るのは最高だと思いつつ、すでに晩梅であるが、私の白髪を雪に見なし、師走を取り戻したいと詠んでいる。また、『二月晩梅』詩「未見梅開二月遷、餘寒吹滿曉鶯前、去天咫尺北枝雪、春在左街官柳邊」も、幾つもの「未見梅」を題材にした詩の一つで、梅と組み合わせる雪や鶯が備わり、春の柳も芽生えたにもかかわらず、梅が開花しないので、焦っている気分が景色の吟詠によって湧いてくるのである。すっかり春になる時期に、「昨夜梅梢月一痕、無由咲語作春温」（『梅梢春雨』）のように、春の暖かさをもたらしている「雨中梅」の景色を描く詩句もある。

景徐の筆のもとで、梅が色によって、「白梅」「紅梅」「黃梅」「墨梅」など四種類ある。その中では、「紅梅」がもっとも多い。「紅梅」詩のなかで、北野⁴の紅梅が何回も現れた。「天神」と呼ばれる菅原道真のその「宰府祠」北野の紅梅も特に愛好され、多く詠まれている。「千里紅梅宰府祠」（『又次韻歲寒老人』）、「紅梅殿北雪逾白、六百年前一夜心」（『一夜白髮天神』）、「意足紅梅北野春」（『贊天神』）、「甚矣吾衰無血氣、今春不夢見梅花」（『夢見菅廟梅』）などから、北野の梅林の雄大さ、梅の潔白さ、十分に楽しんで鑑賞しようとする意欲と過ぎ去った人生への追想など豊富な内容を読み取ることができる。特に『梅野吟歩』は禪の雰囲気溢れ、評価が高い。

「北野春閑丞相祠、紅梅開処歩遲遲、鶯邊不覺夕陽落、花過眼時心有詩。」

長閑な春の日に、梅が咲き乱れている北野を緩やかに歩きながら、鶯の鳴き声を楽しんでいるうちに、日の沈んでいるのをつい気づかず、花が目に入る瞬間に心が動き、詩を詠むことができる。爛漫な春の景色とそれに耽って緩やかに足を運んでいる詩人、目につく鮮やかな梅の赤い色と鶯のきれいな鳴き声、沈んでいる夕日と心の中の詩が描かれているのである。読むことと視覚と聴覚の効果が感じられ、ゆっ

⁴北野：京都北野天満宮のことを指す。

くりと展開している春の景色の画像が生き生きと頭に浮かんでいるのであろう。

中国文学における梅詩のなかでの梅の美しさは大体色、香り、形、ほかの自然物と組み合わせられて描かれている。梅と他の物との組み合わせによって生まれる景色の美しさになると、今まで漢詩のこの類の題材には、梅と鶯、雀、竹、水、雪、月などの組み合わせが多く使われてきた。動物の中で、「鶯」が一番多く見られ、たとえば、「暁日幽崖梅踏白、雛鶯第一又喬遷」（『雲谷』）「就視孤鶯啼在梅」「某寺有梅鶯喚人、尋声野步避車塵」（『鶯声喚雨』）などがそれである。また、中国では「喜雀登梅」の景色は非常に縁起がよいとされ、古くから芸術作品の題材にされている。景徐の漢詩にも『寒雀啣梅五首』があって、「寒雀何曾栖杏桃、野梅枝上訴嗷嗷、青雲展翅豈無日、宮殿風微逐燕高」など、青雲の志など出世の意志を示している。

自然風物の中では、梅と雪の組み合わせがよく現れる。「有梅有雪恁相宜」（『藹月種竹』）。紅梅と雪の色がまったく違って、その組み合わせはとても不思議な雰囲気を作り出すことができる。宋の盧梅坡の梅詩は論理性豊かで、その巧妙な筆致と豊かな論理性で称賛され、特に「梅須遜雪三分白、雪却輸梅一段香」、「有梅無雪不精神、有雪無詩俗了人」は名句と言われる。景徐の「雪後精神尤一倍、花中骨肉是三生」（『畫軸』）、「霜巖好景吟殘橘、雪晚今年俗了梅」（『答芳洲』）などの詩句でもそれを受け、本歌取りをして詠んだものである。また、景徐の「每聽雪飛挑尽燈、梅邊声散竹間凝、誰知多事讀書客、不及五更推枕僧」（『燈下聽雪』）という詩では、夜舞い落ちている雪の音が、竹林でははっきりと聞こえ、梅のところでは静かになって、この詩情溢れる夜に友僧が訪れてくる。「動」と「静」、「明」と「暗」で織り出されている夜の雰囲気と詩僧たちの禅趣ある生活が描かれている。

梅景色の雰囲気をもっとも成功に表現できたのは北宋初の著名な隠逸詩人林和靖⁵の『山園小梅』だと言われている。

「衆芳揺落独暄妍、占尽風情向小園。疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏。

霜禽欲下先偷眼、粉蝶如知合斷魂。幸有微吟可相狎、不須檀板共金樽。」

特に第二句の「疎影橫斜水清淺、暗香浮動月黃昏」は梅の清幽香逸な風格を詠出したので梅を詠む絶唱と思われる。あらゆる花が散って、梅だけが庭の風情を占め尽くしている。斜めで細い姿と清く浅い水、朦朧な月と幽遠で淡々と漂っている香。梅と竹、梅と月、水の組み合わせが初めて使われ、梅の枝の美に目を向け、梅の香、影、姿を一句に収め、清幽で超脱な雰囲気を作り出している。「水月梅」という新たな組み合わせも梅詩の歴史において画期的なことである。⁶この詩句も景徐のもっとも愛好した詩句である。それを模倣して作成した詩作が多く見られる。景徐においてこの詩句への受容と変容がどのように展開したのかを探求するために、以下の表（表 I）にまとめてみた。

表 I

題名	詩句
華光十梅	十様春風入筆奇、 暗香 仿佛襲人吹、雲多 水 闊花光寺、乞與推篷梅一枝
浴梅	雪白寒梅樹下家、爐邊昨夜欲 橫斜 、人間若有扣冰佛、一掬温湯可罵花
梅邊聽雪	雪到梅邊索索鳴、隔窓未辨坐三更、 暗香疎影 無風夜、花有声耶 月 有声
梅龍	不雨何龍影逐流、梅花月淡蘸羅浮、三春從此三分国、水底 橫斜 亦武侯
便面梅花	淡 月 傾雲 疎影斜 、誰歟冠者定良家、梅歲官樣詩村氣、若有和歌不負花
梅船	浅 水 梅花 月 亦浮、 暗香 船尾影船頭、聞曾一葉載唐去、枝上春風四百州
梅邊小雪	天上有梅春一家、羅維翠暮護 橫斜 、曉風吹裂鉄腸漢、見雪片飛疑落花

⁵ 林和靖（967—1028）は北宋初の著名な隠逸詩人で、常に孤高で世を離れた暮らしに憧れたので、西湖に隠居し、梅を妻とし、鶴を子とし、隠逸的余生を悠々と送った。

⁶ 程傑「林逋詠梅在梅花審美認識史的意義」『學術研究』（2001）P. 107

點灯移梅影	昏月梅邊待未昇、 暗香 相對夜瓶冰、禪心逐影應花咲、忽被窓風吹滅燈
點灯移梅影 又	昨夜林間 月暗 時、移梅何以作毛錐、折花窓下點灯看、 疎影 斜懸檠一枝
點灯移梅影 又	疎影橫斜 春不稀、就窓挑盡一燈微、只緣話至黃梅雨、半夜清風吹上衣
題蚌畫 代人	梅開時節奈離愁、此去天涯何處舟、 疎影橫斜 君不見、相思到月下西樓
便面	風竹 月 斧又精神、五鳳飛來修造人、待見梅樓上梁日、 暗香疎影 美哉輪
巽亭賞雪	山中天上一枝新、傳見和歌似侍茵、元與莊椿同壽考、 暗香疎影 八千春
畫梅	可効 橫斜 無俗塵、年過志學夢中春、若非雪 月 手書讀、窓外梅花匿映人
過梅莊論詩	竹裏梅邊是我家、不堪雪壓小 橫斜 、舉盃一咲吟莊上、子美詩中晴昊花
元日	春山寂寂屋依梅、問主人誰去却回、莫道 暗香 無覓處、被松風引度橋來
便面 同	雪後山中致廣寒、重重烟樹玉欄干、梅邊若認 橫斜影 、穿破無明大地看
持呪保梅	有雨有風梅落時、笑吾持呪傍花枝、人歸酒醒可難說、 疎影橫斜 梵語詩

以上の表 I を見ると、景徐周麟の林和靖の『山園小梅』の第二句の受容では、「暗香」「疎影」「横斜」がもっとも多い要素で、「水」「月」と梅を組み合わせた景色のほか、「雪」「竹」「風」との組み合わせも見られる。特に、林和靖の「水月梅」を受け、さらに重視している「雪」と「梅」の組み合わせを生かして「雪月梅」を描写していて、注目すべきである。梅が厳寒を恐れない花なので、「寒」と「潔」を象徴とする雪と合わせてこそ「梅」の「氷肌玉骨」と「清幽香逸」のイメージが出るとされている。また、景徐は林和靖句を踏まえた上で、梅、竹、雪、月などを擬人化し、「香影偏従年後加、也勝藹雪打横斜」や「雪到梅邊索索鳴、隔窓未辨坐三更、暗香疎影無風夜、花有聲耶月有聲。」のように、聴覚も視覚も使って想像力を豊かに働かせながら詩を詠み、梅と雪とで織られた清幽な雰囲気を描いている。また、「羅維翠暮護横斜」「可効横斜無俗塵」「不堪雪壓小横斜」などから、「横斜」はもともと「梅」の形の美を表す言葉であるが、景徐の詩においては、梅の別称になるということも明らかになった。暗香の詩については、宋の王安石の「遥知不是雪、為有暗香来」（『梅花』）が有名である。景徐は、「隔橋未辨梅何處、落日暗香吹在西」（『題画』）「莫道暗香無覓處、被松風引度橋來」（『元日』）などの詩句では、更に林和靖詩における内容と形式を豊富にし、巧みに風、橋、松などの言葉を利用して、「暗香」の幽遠な感覚を描き出している。また、『梅船』では、梅を船に想定し、それに月、梅の影と梅の香がそこに浮いているという格別な想像を生かして、「暗香浮動」のイメージを具体化し、読み手も自然に想像できるようにしている。

二. 梅の精神

中国の魏晋南北朝時代になると、自然の風物が文人たちに重視され、「詠物詩」が一時期流行るようになった。梅も「春景」の一つとして詠まれ、更に詩人の感情や思想も入っていて、情趣を寄託する手段の一つになっている。その中に、主に過去への追想、友との惜別、懐かしい心情などを表す作品が現れた。例えば、唐の王維の『雜詩』「君自故郷來、応知故郷事、來日綺窓前、寒梅著花未」は故郷への懐かしさを表すもので、「冬風吹梅畏落尽、賤妾為此斂蛾眉」（鮑泉『咏梅花』）は梅の散るのを見て、好きな人への思いを表す「閨怨」作品である。景徐の詩では、「梅未着花寒雨零、離愁無限短長亭」（『招接周浦雲少年』）「君負梅花草草還、人生易老別離間」（『題蚌畫代人』）のような友との離愁や惜別を表すものもあれば、「年華與老日相催、別後京門落尽梅」（『寄韶陽侍者』）のような過去への追想と人生への思考が含まれるものもある。また、梅の咲く季節に、人と別れる時に「折梅相贈」の習慣があった。『荊州記』

において、「陸凱與範曄交善、自江南寄梅花一枝、詣長安與曄」の記載がある。中国の南朝時代の陸凱は範曄に折った梅の花を贈り、「折梅寄驛使、寄與隴頭人、江南無所有、聊贈一枝春」（『贈範曄詩』）という詩も書いた。景徐の『結尋梅社』の「結社逢迎遽別離、都門寒雨早梅時、自今修得旧盟否、一朵遙煩驛使來」や「郎君下馬去何處、欲折梅花插綉鞍」、「天涯遠欲折梅寄、探請江南春幾只」（『次韻汝雪』）などもその典故を念頭に作った詩句であろう。

宋の時代の蘇東坡が「桃卑梅尊」を唱えることによって、梅の象徴は「実」から「虚」に一転し、梅の精神の美も詩人たちに注目され始めた。⁷「梅」は「凌寒独自開」の花で、寒さに耐える歳寒精神と孤高超脱な美質で称賛されている。また、明の時代の黄鳳池の『梅蘭竹菊四譜』によって、「梅」「蘭」「竹」「菊」は「四君子」に呼ばれ、それからの中国伝統文化の題材とされ、文学作品の中にも数多く見られる。梅は四君子の初めとして、「探波傲雪、高潔志士」と言われ、中国人の精神世界の一隅を占めている。範成大の『梅譜』では、「梅以韻勝、以格高」ということで、梅は特別な韻と品の高さで四君子の頭とされる。さらに、南宋の林景熙の『五雲梅舎記』に「即其居累土為山、種梅百本、與喬松修篁為歳寒友」の文があって、「歳寒三友」という説がそれで誕生し、梅は松、竹とともに嚴寒に耐えられ、堅強で不屈な人格の象徴として認識されるようになった。

『翰林胡蘆集』所収「松悦字説」の冒頭部分に「盖夫草木之嘉者也、擬之於賢人君子而言焉、古今之通論也、黄太史以松之興梅、比之於東坡、坡曰、託物引類、得古人之風…古之君子、大率重其在内者、在内者、忠信礼儀是也、孔子有言曰、歳寒然後知松栢之後凋、謂士窮乃見節義也、夫松之為物、挺然而生、上於雲漢、而其質輿色貫四時、霜之雪之而不少渝、閱世愈久、而愈堅且茂、君子於此誠能視松之茂、以務蓄其德、視松之堅、以務存其意義、視松之閱世愈久、以務養其生、視松之挺然而生、以務立其身…梅兮松兮、在人不在樹…」とある。これは景徐が、孔子の「歳寒然後知松栢之後凋」の名句を引用して道号を求める後輩を教育する文であり、松のように徳を蓄えたり、身を治めたりしようと後輩への期待を説いている。景徐の「三益齋詩 并序」でも「…且松之生也、貞堅、竹之生也、挺特、梅之生也、優而潔、又皆歷歳寒而不改其操…」とあって、「歳寒三友」は嚴寒を恐れず、美德を変えないという点に通じていると認識している。その詩句の「萬木之中松独正」（『次前韻奉謝昨來佳貺』）、「始終如一歳寒色、雨沐風梳女丈夫」（『連理松』）や松の「歳寒独以後凋之」などで描かれているように、松は嚴寒に耐えられ、風雪による嚴寒に対して不屈の精神を謳歌している。この「歳寒精神」は「堅心勁節」があるためであると景徐が思い、「古人有以荷花為淨友者、淨則淨矣、或有雨折風吹之可嘆也、有以桂花為仙友者、仙則仙矣、又有月落雲漂之不可攀也、夫松之挺出於山林、堅心勁節、貫四時以無變態者也、以此為友、可謂先擇而後交者矣。」（『友松齋』）と松柏の節操を重要視している。また、そもそも歳寒の友には「松」と「竹」だけがあって、「梅」がなかったため、景徐の詩では「益友惟三古所聞、梅花松竹共平分」（『便面 同』）「歳寒三傑有花在、恨殺魯論遺却梅」（『歳寒知松柏』）、「歳寒三友不羞梅」（『題画』）とかは、梅の松柏に負けない歳寒精神を強調し、更に「竹友松朋喜氣佳、我儂骨肉有梅花」（『益仲』）、「三友相依作五人、溪邊迎送地無塵、松青竹翠俱心白、不道梅花有別春」（『畫』）などと詠み、竹と松より、梅が自らにとって特別で、親しい「骨肉」だと自らの梅への愛好を表している。

こうして、梅は、単なる花ではなく、高度に擬人化されることによって、文化と精神の象徴となっている。元の景元啓の『双調 殿前歡 梅花』では「梅花是我、我是梅花」の句があって、梅を借りて自身の高潔な美德を示そうとしている。また、宋の陸遊も「何方可化身千億、一樹梅花一放翁」（『人間』）の詩句でも、自らを梅に比している。中国文学における梅の人格的概念は強剛、沈勇、堅強、孤高、淡泊、静寂、高潔、忠実、不屈などが含まれている。この「傲雪臨霜」と淡泊隱逸の氣質を持っている梅

⁷王曉燕「中国古典詩歌中梅花意象的變遷及其審美價值」『職大学報』（2010）P. 11

も五山禅僧たちに特に愛好され、新たな日本漢詩における境界を展開させた。

中川徳之助⁸氏は五山文学の研究の中で、当時の五山禅僧の漢詩における梅の精神を「雪精神」「月精神」「氷玉精神」とまとめた。「雪」や「氷」は「潔白」を表す意象、高潔な人格の譬えで、「月」は「孤高」の象徴で、禅僧の俗塵離れの心境に合っている。林和靖の「疎影横斜水清浅、暗香浮动月黄昏」の「梅月」に対して、景徐は「梅雪精神」を殊に重視している。宋の辛棄疾も「然無花態度、全是雪精神」とあって、「梅」の精神は「雪精神」に等しいと強調している。景徐の漢詩では、「雪晚今年俗了梅」（『答芳洲』）「天下無梅俗了人」（『題和靖像』）、「有梅無雪不精神」（『冷香齋』）なども、この「梅雪精神」をよく称賛し、強調している。また『以月齋詩』では「尋常以月比吾心、心自孤圓無古今、不信但看五更後、梅邊任運影西沈」、心を月に比し、さらに「梅邊任運」のような超脱な人生への思考を加え、「梅月精神」と言える孤高な精神世界を展開させている。「氷玉精神」については、古くから梅は「冰作骨、玉为容」「玉骨冰姿」などと言われ、景徐の「骨骼如圭又如碧、難兄況有玉梅花」（『琳伯』）「十様梅花見未曾、筆尖一一潔於氷、詩家省識春風面、写寄江南樹下僧」などの詩句でも、その「玉骨」を称賛している。また、『冷香齋』では「夫梅天下尤物也、在於三冬氷雪之中、而石心鉄腸、出冷蘂兮吐冷香、觀之令人自然消名利之心也、可敬矣、余謂其生乎越者、可必十倍於恒地耶、何以言之、則彼千岩萬壑絶之氣、結而為奇花、鐘而為異材、以故越多名士、猶如花之有冷香、不言其他…梅花亭上三更月、一洗塵縁有冷香」では、梅は「千岩萬壑」の俗世から離れていて、「三冬氷雪」において冷たい香を漂わせ、人間の「名利之心」を消す梅の氷玉精神を強く主張し、「冷香」のある梅を名士に喩え、その「石心鉄腸」を歌っている。

梅の擬人化が完成してから、梅の美質を詠むことによって、特定な人間の徳を称賛するような「比徳」作品が大量に生まれた。例えば、陸遊は『園中賞梅』において、「人間商略誰堪比、千載夷齊伯仲間」と詠み、先秦時代の伯夷と叔斉という二人の君子を梅にたとえ、その高徳を称賛している。「梅」を愛好するが故、景徐はこの「梅」を好む人物に比する作品のなか、林和靖がもっとも多く詠まれている。林和靖は西湖の梅山に隠居し、梅を植え、それを妻にし、鶴を養い、それを子にし、いわゆる「梅妻鶴子」のような世を忍ぶ超脱な人生を送っていた。景徐周麟の友人の南陽老人から「岩栖明照塔銘」を求められた際、景徐は「梅溪」を撰した。「昔何仲言之在揚州也、吟脈乎梅花下、千古風流也。蓋字取諸此、而意在祝乎？彼故家喬木、深根於南屏永元之土、而布蔭於東海之外者、久昌而已矣。喬木為何？梅花是也。拙偈一篇系之：鷺嶺風香花一枝、非桃非杏又非梨。西湖三百六十寺、涵影水皆含月時。」（『梅溪』）この文で、景徐は林和靖の「梅妻鶴子」の故事を引用し、臨安禅宗の「布蔭於東海之外」の功德を称揚しながら「梅」のイメージを借りて俗塵離れの禅僧の理想像を描いている。『翰林葫蘆集』では、林和靖を称賛する漢詩が多く見られる。景徐は『題林和靖二首』の「下有巢由上有堯、梅花門戸雪連朝。春風不似東風架、吹過西湖第四橋。」では、林和靖の高潔を臣としては許由巢父、君としては堯と対照させている。『題和靖像』では、「西祀東封別置春、一聯香影至今新、相如出漢有遺憾、天下無梅俗了人」と詠み、林和靖の出世をやめ、自ら山で梅とともに隠居したことを称賛している。『西湖図』詩「蘇公堤畔柳藏徑、和靖宅前梅臥灣。欲識雪時奇絶处、上方樓閣人間」においては、「梅」と「雪」の結合こそが「奇絶」と主張しながら、蘇軾と林和靖を賞賛している。林和靖のほか、「謫仙醉傳姓兼名、真箇於梅集大成、雪後精神尤一倍、花中骨肉是三生。」（『畫軸 又』）で「謫仙」李白を、「昭陵若暗蘭亭骨、散作園林梅半枝」（『贊王羲之』）、「蘭亭五字梅花裂、分與江南樹下僧」（『魯直草書扇子』）で王羲之を梅に喩えて称賛している。さらに、当時禅林における「年相若也、道相似也」（『畫屏』）の道友菊仙蔵主を追悼する詩句「年年憶昔会君家、句法唐耶書晋耶、猶似平生対顔話、夜深和淚見梅花」（『画屏』）でも、「捻其為人、如玉

⁸ 中川徳之助『日本中世禅林文学論攷』（1999）清文堂 P.10

在盤中、無一点塵俗之氣」(『畫屏』)で、菊仙蔵主を清潔で、塵俗の気がない梅に喩えている。

また、弟子の師匠として、景徐は『賦早梅送人帰西州詩序』では「所謂業荒于嬉毀于随、此花鉄腸石心、不渝操於霜雪凜冽之其庶幾乎、但恨予之非其盆也」と述べ、弟子の学業を怠り、不精進のことを叱る。景徐の梅詩に見られるもう一つの特徴は梅と読書が共に現れることであり、例えば、「松竹雨声梅月影、読書燈下総相宜」(『三盆斎詩』)、「孤燈影淡読書処、細雨梅花西出関」(『結尋梅社』)、「三冬苦学梅邊雪」(『実習斎』)など読書生活を描く詩作もたくさん見られている。

三. 梅と悟道

そもそも禅というのは「不立文字」、「教外別伝」を宗旨としているもので、教えや悟りの内容は文字や言葉によらず、心の触れあいによって、悟りの境地に達することを主旨としているが、当時禅林の「詩禅一味」や「禅儒一致」乃至「儒釈道一体」の風潮が盛んになった故、「文」によって「道」を表現することが一種の方式として用いられるようになった。景徐周麟の詩文では、「道德」についてしばしば言及されている。「道」と「徳」の関係については、まず、老子の『道德経』では、天地万物は皆「道生之、徳蓄之、物成之、勢形之」(『道德経』)即ち、万物の形成は「道」により、その長い存続は「徳」によるというものである。儒家經典の『易経』でも、「君子以厚徳載物」が述べられている。「道」と「文」の関係については、「道之顕者、謂之文、盖道無形、顕於文而後乃見」(『顕甫字説』)即ち「文」も「道」の外部的表現の一種である。「道德文章」は儒家文化における価値観を外部に表したものである。景徐は禅儒一致の立場から「道德文章」を主張し、「至若道德文章震耀乎一世、而戒乘急乎其内、則天下仰之、以為古佛在矣。」(『含雪軒図詩序』)と述べ、「道德文章」の外見を借りて「道德」を唱える儒学者を戒乗を厳守する宗教家に喩え、求道の真意を儒という補充的手段で表そうとしている。その「梅坡字序」では「…孜孜読書、以至於雪堂青城才之美文之華発乎外、而曾祖道德之実具乎内、挺出於叢林歳寒之後…」と年少僧への教諭を借りて、文を為すべき原則を掲げた。室町後期の禅林の指導者としての景徐周麟は優秀な人材になるために二つの基準を提出している。「美文之華」は「発乎外」のもので、それは文章など文学作品の表現の技などに対する要求であり、「道德之実」は「具乎内」のもので、禅林の弟子として心の中で「歳寒精神」の保持こそが本質的なものだと述べている。

また、景徐の『梅荘字説』では「先天即梅花在焉、深根於四聖人未発之地、而開花於六君子之林、枝上太極、枝上乾坤、一一可見矣、盖和靖之所伝」があつて、梅は美德に恵まれる高潔な花で、「君子之徳」が備わる一方、梅から「太極」「乾坤」が見られ、「一花一世界」の概念も窺える。もともと禅は自然に親しみ、自己を山林に投身して天地万物と「同楽」し、それを求道の手段とする。応仁元年(1467)、景徐は江洲慈雲菴に横川景三を訪ね、「満目満耳、澗水松風、盡是一性所印」という示唆を受け、ようやく大悟した。『翰林葫蘆集』の「答友竹蔵主書」では、景徐周麟は、友竹蔵主からの「毎日禮佛看經、經者非黄卷赤軸、佛者非木刻塑像、屋上之山即法身、屋下之水即廣舌、而在此中、以嘯歌、以啐嗟、禮佛看經、如斯而已矣」という近況を報ずる書翰に答えて「下視山河大地草介人畜情與無情、全非他物、而後道余禮青山青山禮余亦也得、道余聞溪水溪水聞余也得、道山色法身也得。道溪聲廣舌也得、道泥木非佛也得、道黄赤非經也得。」と言う。ここで、景徐は、山河大地、植物、人畜など、有情であれ、無情であれ、それらを同一視し、いわゆる「全非他物」にし、自然万物の本質が共通であり、「道」を悟ることもそのなかから得しめると主張している。

中国古代の哲学の根本的観点の一つは「天人相応」「天人合一」である。それは儒家、道家、佛家がともにある思想である。儒家の經典の「易経」では「太極生兩儀、兩儀生四象、四象生八卦、八卦演万物」(『易傳・系辞』)「天地感而万物化生」(『丰卦・彖傳』)などの説がある。荘子の「斉物論」

の中でも「天地與我並生、万物與我為一」と述べ、「万物一体論」の思想を初めて提出した。抜隊得勝⁹の有名な「塩山仮名法語」の「天地と我と同根、萬物と我と一體にして、微塵ばかりも別の物なし。溪の聲も風の音も主人公の聲なり。松の青さも雪の白さも主人公の色なり。」とよく似た考えではなからうか。五山禅僧はこの儒釈道に共通する「天地同根」の思想を融合して自己の求道人生の指標とした。

「予徒曰龍。自卯歲侍乎予傍。小補師字之曰古梅。所以予之命名者。取諸易也。乾之初九曰。潛龍勿用。九二曰。見龍在田。九五曰。飛龍在天。象曰。潛龍勿用。陽在下也。見龍在田。德施普也。蓋龍喻陽氣。比之於梅含一陽於地底。是則潛龍勿用也。癸乾元一氣於冰雪中。是則見龍在田也。及乎桃李艷陽之時。為百花魁。而挺出乎萬木之上。是則飛龍在天也。可得而判焉。故曰。天地同根。万物一体。謂是乎。龍出紙求書焉。予仍告曰。梅者果中之嘉矣。龍之求者見於色。遂述二十八字。証古梅二字云。一樣二千年遠春、心花發現属当人、不須更刻梅檀像、雪骨氷肌淨法身。」

これは景徐の「古梅」という字説¹⁰である。作者は名が「龍」の弟子に「古梅」という道号を授ける時の字説であり、「龍」と「梅」のかかわりについて述べている。「潜龍勿用」は「陽在下」だから、それは梅の場合になると「梅含一陽於地底」になる。そして梅の一陽の気を地に含んでいる状態を易の乾卦に見える「潜龍」になぞらえ、「見龍在田」になる。そして、景徐は「天地同根、万物一体」とまとめた。このような禅僧の自然観は「道に自己向上の実践的行為」¹¹につながるものではないかと考えられる。こうして梅は「道」の外在的且つ具体的表現として認識されている。さらに景徐は次の偈「一氣本從何處來、時人多認外邊梅、此枝不借春風力、須有心華連夜開」(『陽中』)によって、梅の花がきれいに咲いたのは春風のおかげではなく、「心」によるものであるという主張をし、「道」の外在的表現と内在的表現の関係を示している。また『芳叔字説』では、「遊乎天地同根之野、登乎萬物一體之山、看花去花來、知無一法門在外…其謂之在人不在花、亦固然矣」の句があり、悟道の「法門」は「花去花來」を観ている間にあり、「在人不在花」と、「道」の内在探究を主張している。さらに、「江山千里窓前月、天地同根湖上梅」(『寄保寿老人』)では、「江山千里」は「窓前月」に帰し、「天地同根」のその「根」は梅であると認識しており、それらは悟道の境地に達してからの世界観であろう。

以上、景徐の『翰林葫蘆集』によく現れる「梅」をめぐって分析したが、景徐は「梅」を天地万物の初めだと思い、「梅」の高潔を称揚することによって、禅僧として常に高潔な心境を保ち、「道心」を失わないようにと主張している。「梅」のほか、「柏」も景徐に「道」の外在的表現と認識される。「四徳纔分清者天、始呼一氣本渾然、皮膚脱落有真宝、成佛須還柏樹先」(『乾貞號』)と吟じたように、「柏樹」が一切の先駆である。さらに、景徐はこの「梅」や「柏」を具体的な人間になぞらえ、「萬象之中生棟梁、栽培全不假陰陽、與他括柏同根否、人有名僧地有樟」(『豫南』)のように、地道に求道する「名僧」は「柏」とは同根であると認識している。こうして、景徐はこの「天地同根、万物一体」の認識を具体的な生き物、更には人間にまで広げている。「下其重濁上輕清、一大為形不可名、特地豁開文戸口、僧中又有李長庚」(『天啓』)や「莊嚴域移海上天山、天地同根萬物一體、廣照祖唱濟北道、日月合璧五星連珠…春則學詩秋則學書、才高藝苑、武而用金文而用木、名振緇林、心牧秦耕漢耘、夢遊洛河伊水、芙蓉生秋江上、憶光狀元於龜山、芭蕉送夜雨聲、得王和尚於相國…」(『金溪住相國』)のように「聖人」や優れた「学者」と「僧」を天地と同じ地位にし、「天人合一」「天地同根」の境地に至っている。以下は『梅龍字説』を例として詳しく分析する。

⁹ 抜隊得勝(1327-1387)南北朝時代日本の禅僧。臨濟宗向嶽寺派に属する。『塩山仮名法語』『和混合水集』を著している。

¹⁰ 字説とは後輩から道号の命名を依頼された禅僧が、被命名者の法名とのかかわりを考えて道号を与え、道号の持つ意味を文にし、被命名者の将来の大成を期待するという教育的意図を含めて作られたものである。

¹¹ 中川徳之助「五山文学の世界」『大東急記念文庫公開演講録「五山の学芸」(1985)財団法人大東急記念文庫 pp62

「古人有以梅為太極者、又有謂梅花枝上識乾坤者、易有太極、是生兩儀、兩儀生四象、四象生八卦、夫對極以上、伏羲氏未嘗言之、請試以卦爻論焉、曰在易之乾、初九潛龍勿用、其傳曰、陽氣潛藏、是乃梅之含一氣於萬木凍折、百草摧殘之時者歟、九二見龍在田、其傳曰、天下文明、是乃冷蘂寒花、堅芳明潔者歟、九三終日乾坤、其傳曰、與時偕行、是乃雪態冰姿、饜虐憑凌者歟、九四惑躍在淵、其傳曰、乾道乃革、所謂疎影橫斜暗香浮動者歟、九五飛龍在天、其傳曰、乃位乎天德、所謂亂插繁花向晴昊者歟、上九亢龍有悔、其傳曰、與時偕拯、所謂歲月坐成晚烟雨青已黃者歟、吁乾德備乎梅矣、以龍為象、龍陽物也、故日時乘六龍以御天、是所謂天上靈梅乎、萬年有佳鬢年、其諱曰登、吾養花先有之季子也、其字曰梅龍、吾栖芳老師之所命也、蓋其辭取諸登龍乎、副龍以梅、其義取諸養花乎、觀其所養也、非桃非李非姚魏之花、而百花魁是也、養正則吉也...其庶幾乎、勉之哉、」

この文の趣旨を以下のような表（表Ⅱ）にまとめてみる。

表Ⅱ

	爻辞	傳	梅	出典
初九	潛龍勿用	陽氣潛藏	含一氣於萬木凍折、 百草摧殘之時	唐・齊己「萬木凍欲折、 孤根暖獨回」(『早梅』)
九二	見龍在田	天下文明	冷蘂寒花、堅芳明潔	唐・杜甫「巡檐索共梅花笑、 冷蘂疎枝半不驚」(『舍弟觀赴藍田取妻子到江陵喜寄』) 宋・顏延之「物忌堅芳、 人諱明潔」(『祭屈原文』)
九三	終日乾坤	與時偕行	雪態冰姿、饜虐憑凌	宋・無名氏「梅蘂露鮮妍、 雪態冰姿巧耐寒」(『南鄉子』) 唐・韓愈「歲弊寒凶、 雪虐風饜」(『祭河南張員外文』)
九四	惑躍在淵	乾道乃革	疎影橫斜暗香浮動	宋・林和靖「疎影橫斜水清淺、 暗香浮動月黃昏」(『山園小梅』)
九五	飛龍在天	乃位乎天德	亂插繁花向晴昊	唐・杜甫「安得健步遠移梅、 亂插繁花向晴昊」(『蘇端薛復筵簡薛華醉歌』)
上九	亢龍有悔	與時偕拯	歲月坐成晚、 烟雨青已黃	宋・黃庭堅「歲月坐成晚、 烟雨青已黃」(『古詩二首上蘇子瞻』)

中国の儒家經典『易経』の「乾卦」の爻辞の意味が龍の活動によって説明されている。龍は古代中国人が仮想で作った動物のイメージで、中華文化における重要な要素である。「乾卦」の爻辞における龍は水に潜り、田野に現れ、深い淵を躍り、天を飛ぶことができる。龍は君子のように「終日乾乾」、乾卦の「天行健、君子以自強不息」の意味を示している。それに対して、梅はあらゆる植物の枯れる時期に陽気を隠し、寒い早春に明潔に花を咲かせ、氷玉のような品質を備え、厳寒の虐待を耐え抜き、「疎影横斜暗香浮動」の至高の姿と雰囲気を作る。そして、春の暖かい日を浴びて咲き乱れ、最後の美しさを世に見せるような生命の過程である。景徐は「天地同根、万物一体」の概念から出発し、さらに中国文学における梅詩を受容し、その詩句の概念を十分把握したうえ、龍と梅の対照を行いながら、その共通の品質と生命のあらゆる過程における状態を分析することによって、そのイメージと概念を万事万物に拡大させ、人間も同じように、天の精神の「自強不息」と梅の不屈、剛毅な精神を備え、弟子の精進を期待し、「梅龍」という字をつけてあげた。中川徳之助がこの「天地同根」「万物一体」の禅僧の自然観を「道に自己向上の実践的行為」¹²と評価しているように、自然と山林に親しむ禅僧は自ら目の前の風物を「道」

¹² 中川徳之助「五山文学の世界」『大東急記念文庫公開演講録「五山の学芸」』(1985) 財団法人大東急記念文庫 p. 62

の範疇に入れて随所随時に求道が続けている。禅は「明心見性」の修行により、自他不二、真俗不二、万物と我との一体の境地に達し、人々を導いて仏果を得しめるのである。

終わりに

室町時代後期の詩僧景徐周麟は梅を愛好し、数多くの梅詩を作成した。景徐は中国文学の中の梅詩の歴史におけるあらゆる段階の題材、いわゆる魏晋南北朝時代までの「遺梅」、それからの「報春」の使者とされた梅、また唐の時代になって次第に進んで擬人化及び人格化された梅、さらに、宋の時代から形成された「歳寒精神」と「四君子」の頭とされた梅などをそのまま受容し、またその様々な形象概念を生かし、自分なりの変容を成し遂げている。特に、梅の高潔で、不屈な人格的特徴、林和靖の「梅妻鶴子」の典故から生まれた疎影、暗香、横斜などによって描かれている驚異に値する梅景色の雰囲気、あるいは中川徳之助のまとめた「雪精神」「月精神」「氷玉精神」など、あらゆる歴史的段階と異なる性格の梅を詩に書きいれ、膨大な梅詩を表わした。また、林和靖の梅詩における「水月梅」と景色の雰囲気を受け、さらにその組み合わせを豊富にし、「雪月梅」を作り出している。景徐は、「骨肉」とみなしている梅を惜しみ、禅の趣や生活情趣の溢れる詩作を数多く作り、梅とともに読書生活を送る詩僧の意趣と志も詩に込めている。

「詩禅一味」、「禅儒一致」さらに「儒积道一体」の風潮の中、景徐周麟は梅を悟道の手段とし、「道徳文章」の創作を文筆の目標にし、「梅」をはじめとする意象を思考することによって、「天地同根、万物一体」を悟り、悟道の境地に達している。特に『梅龍字説』では、景徐は悟道における敏感な自覚及び漢文教養を生かして、「龍」と「梅」の共通する性格と生命の過程を分析した上、さらに「天地同根、万物一体」の意味を具体化させ、自己の「自他無二」の境地に達していることを表している。景徐の求道は、ひたすら「心」のような人間の内部世界によるものだけではなく、外の有形かつ具体的な事物にも訴え、内外ともに求めるということである。儒积道がともにある「天地同根」「万物一体」の思想によって、「道」の外部世界が無限に拡大され、具体化され、「梅」をはじめとする意象を借りつつ、悟道の真実を伝えている。

以上、景徐周麟の漢詩文における「梅」のイメージを時、色、組み合わせ、情趣などによる「梅の美しさ」、擬人化された「梅の精神」、そして禅僧としての景徐の「梅と悟道」の真実など、三つの視点から考察した。景徐周麟の詩における様々な意象は数多く、内容がかなり豊富である上、そのイメージと概念も異なるゆえ、それをこれからの研究の課題にしたい。

参考文献

- 朝倉尚 『禅林の文学——中国文学受容の様相』(1985) 清文堂
 玉村竹二 『五山禅僧傳記集成』(1983) 講談社
 玉村竹二 『大東集記念文庫公開講座講演録 五山の学芸』(1985) 財団法人大東急記念文庫
 上村観光編 『五山文学全集 第四巻 翰林葫蘆集』(1973) 思文閣
 中川徳之助 『日本中世禅林文学論攷』(1999) 清文堂

論文

- 夏毅輝 『“万物一体論” 与魏晋南北朝儒、积、道的融合』(2000) 船山学刊 2000 年第 2 期
 劉曉慧、周建華 『宋词中的梅花意象探析』(2013) 名作欣賞 2001 年第 7 期
 王曉燕 『中国古典詩歌中梅花意象的變遷及其審美價值』(2010) 職大學報 2010 年第 2 期